

よみがえれ 古海城 《フルウミグスク》

～ 悠久の時の流れを感じさせる喜屋武岬先端の具志川城跡 ～



国指定史跡 具志川城跡（2004年1月撮影）

糸満市喜屋武に所在する具志川城跡は、琉球政府文化財保護委員会によって史跡指定を受け、沖縄の本土復帰に伴い国の史跡として指定されました（1972年5月15日）。史跡指定を受けた後は学術的な調査が行われないうまま、城跡は今日まで荒廃の一途をたどっていました。糸満市では、平成12年度より国と県の補助を得て、現在、具志川城跡の保存修理事業を進めています。本報告では事業開始から平成15年度までの発掘調査及び保存修理の概要について報告致します。

2004年 3 月

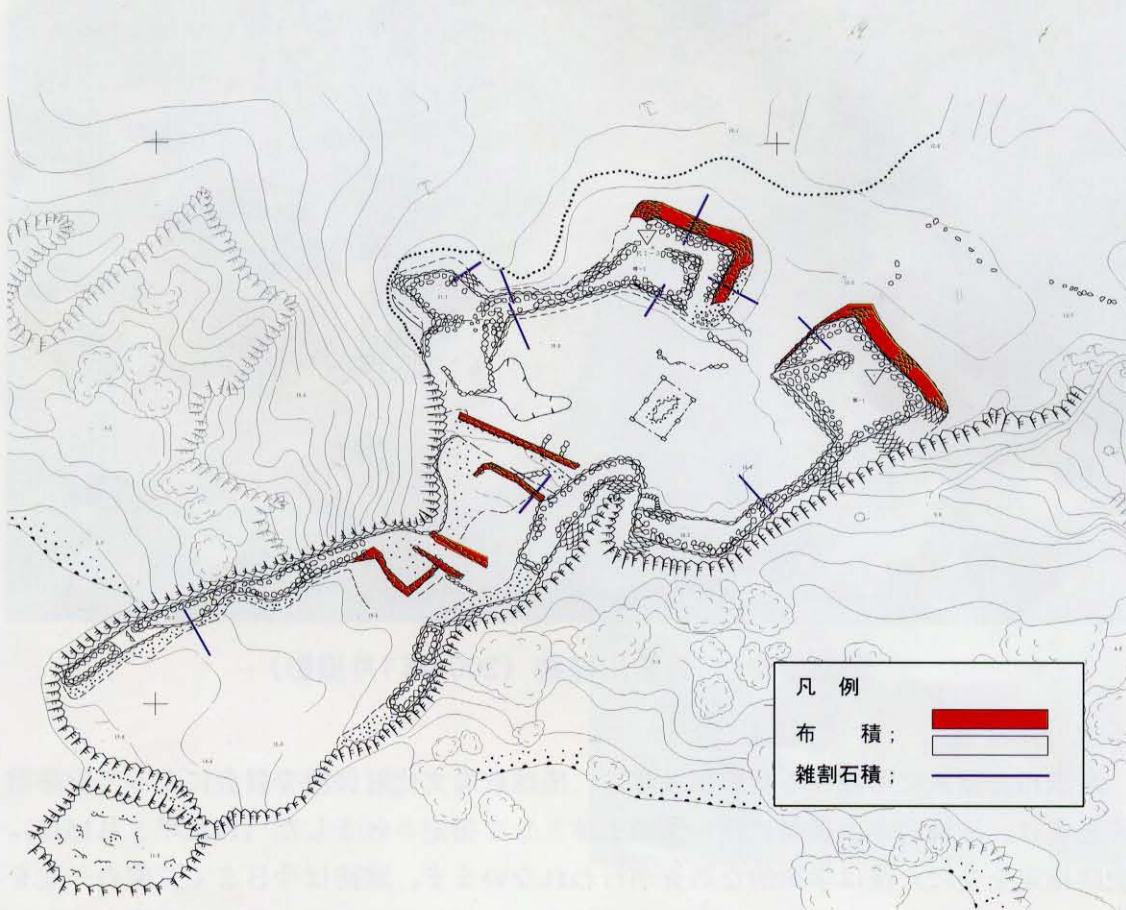
糸満市教育委員会

具志川城跡は、沖縄本島最南端の字喜屋武具志川原に位置し、海に突出した標高約17mの海食崖上に築かれたグスクです。正門付近以外は三方が海に面した断崖となっています。自然景観も良く、発達した海食崖と雄大な太平洋を望み、城跡見学の他、年間をとおして釣りやサーフィンを楽しむ多くの人々がここを訪れます。

具志川城跡は平成12年度の保存修理事業が実施されるまでの間、以下の事業を市の単独事業として実施しました。

平成3年度 航空写真地形測量

写真測量用航空機で航空写真を撮影し、石垣などグスク時代遺構の現況地形測量を行いました。



第1図 測量図に石積み現況を加筆した図面

平成9年度 『具志川城跡及び周辺グスク環境整備基本構想』を策定

具志川城跡と周辺グスクの保存と有効的な活用方法についてまとめました。

平成10～11年度 保存状況確認調査

「スーフチミー」のある城門側郭の遺構確認調査を実施、同西側で虎口（コグチ・海に降りる門）を検出、岬部へいく境界に基壇と石段を確認しました。発掘調査では表土から砲弾片や薬きょう等の戦時遺物が多数検出されており、今次大戦で激戦地だったにも関わらず石垣などグスク遺構が比較的良好に保存されていることが分かりました。



伐採によって明らかになった北のアザナ外郭。
激戦地であったにも関わらず崩落が少ない。
作業にあたった地元のおばさん達も「戦後始めて見た」と感激していた。

確認された基壇部の発掘風景。

写真中央部で柱をのせる礎石と思われる丸みを帯びた石数個が検出された。一部に赤く焼けた痕跡も見られる。



平成12年度

平成12年度は保存修理事業の開始年度にあたります。これまで雑木に覆われ日の日を見ることがなかった石垣などを明らかにする目的で、城内の草木の伐採作業を主に行いました。伐採前に植物調査を実施、在来植物・帰化植物合わせて約100種類が確認しており、押し花で標本を採取してあります。

木々の伐採には慎重を要します。ガジュマル等の根が石垣内部まで侵入しており、根を枯らすことが石垣の崩落を早める結果になります。修理計画年度までは生かす必要のある植物もあります。伐採作業後、城内全体を覆う腐葉土の除去作業を行いました。結果、石垣の延長ラインや交差ラインが見えてきました。

伐採作業前の具志川城跡。

城内にはガジュマル、オオハマボウ
(ユーナ)、アダンなどが群生している。



伐採作業風景。城跡先端・岬の郭。

除去された木々や草は城門外に運び
出す。徐々に石垣が姿をあらわす。

保存修理事業は長期に及ぶため統一した座標が必要です。城内に基準点を3点設置、それを基準として4mを単位とする網（東西南北の軸を使い、城全体に調査のための網かけ）を設置しました。

平成13年度

平成13年度は石垣内郭の一部の石が抜け、崩落の危険性がある北のアザナの緊急解体修復を行いました。修復部分の石に番号を付し、写真測量の手法で現況の図面を作成します。作成された現況図に解体範囲を示して新たに設計を加えます。具志川城跡では初めての修復工事になるため、解体から修復まで作業は慎重に行いました。作業対象地区はこれまで自然石を用いた「野面積み」と表現していましたが、自然石材をただ積み上げるだけでは石垣は高く積めず、すぐ崩れるそうです。自然石の一部を打ち欠いてそれぞれをかみ合わせて積み上げる「雑割り石積み」で積み上げていきます。



北のアザナ、石垣解体風景。

内郭部の石・一列目を慎重に外していく。表面には番号が付いており、表面の石と裏込めの石とを分けて解体していく。



解体後、新たに積み上げられた石垣。

灰色の石が既存の石で、解体前の位置にはめるようにした。赤味のある石が新たに加えられた石。裏込め石を再利用した。既存の石垣と修復した石垣の間には薄いナマリの板で仕切っており、修復した範囲が分かる。

当初、同じ番号石を元の位置に戻す方法で積み上げていましたが、風化が著しくかみ合わせが悪くなって元の位置で復元することが困難となりました。傾きと天板の勾配についても設計角度で修復を試みましたが、それぞれ違う形・大きさの石材をくみ合わせていくため、結果的には石工の経験と石材のかみ合わせが必然的に勾配を造るかたちで修復工事が終了しました。

平成14年度

平成14年度は、石垣城外の遺構確認調査に重点をおいて調査を進めました。本城跡はそのほとんどが保安林の指定を受けているため、現況は全体が雑木で覆われています。そのため、保安林内の文化財調査はこれまで一度も実施されたことはありませんでした。そこで保安林の現状変更許可をもらい、林内の発掘調査を実施しました。保安林は指定地に二筆あり、それぞれに3ヶ所で試掘調査を実施しました。東側保安林ではグスクと関する遺構や遺物包含層は今回の調査では確認できませんでした。西側保安林では、本城跡の外を守る「土塁」の一部が確認されました。土塁は、現舗装道

路側で幅約1間（約180cm）で両サイドに石列を設け徐々に高まりを造りながら城跡石垣を遠く取り巻く形で西に延びています。

城門正面に茂る保安林。

グスク侵入路が里道で、左右が保安林となってガジュマルやオオハマボウ、アダン、松などが茂っている。モクマオウは戦後、喜屋武の住民が植栽した。



上の写真左側保安林内で確認された土塁。

掘り込んだ土をグスク側に盛り上げて土盛りの帯を造り出している。露呈しているのは石灰岩の岩盤で、表面が風化で丸みを帯びている。平成15年度の表面踏査で西方向へさらに延びているのが確認されている。



土塁の高さは約1メートル。外側の土を掘り込んで土盛りを行っています。今回は、土塁の本格的な調査までは実施できませんでしたが、土塁の上に杭を打ちこみ、板や竹などを用いて塀を造っていたかも知れません。

平成15年度

平成15年度は、城跡先端・岬の郭先端部の発掘調査から開始しました。先端部の表土を剥ぎ取り、石垣の基礎残存調査を実施、石垣内郭側の基礎を確認しました。西側石垣については、崩落した石を全て撤去し、内郭を露出させました。同石垣は、一部でガジュマルの根による「ハラミ」が見られますが、比較的良く保存されていることが分かりました。同石垣については、市内で始めてレーザーによる三次元測量を行っています。レーザー三次元測量とは、レーザーを石垣に照射し、点で石垣面を測定す



15年度発掘風景



確認された岬先端石垣基礎



基礎部が現れた西側石垣

るものです。パソコンで三次元の立体画像が見られ、画像を反転させていろんな角度で見ることができます。具志川城跡では、石垣の内郭全てをこの手法でデータ処理し、将来的には立体画像としてデータを管理、復元想像図などの作成で活用していきます。その他、岬先端部の発掘調査も実施しました。ここについては、写真測量後、設計に入り、今年度中にはその一部が修復される予定です。



内郭側、レーザー観測風景。

レーザー照射中、石垣面に赤い点が高速で上下するのが見える。手もとのパソコンに結果が映し出される。

石垣外面の撮影風景。

5mのアルミ製アームにカメラを取り付け、崖面を撮影する。写真測量用カメラは高価（数百万円）なため、慎重にアームを伸ばして固定、リモコン撮影する。



出土遺物

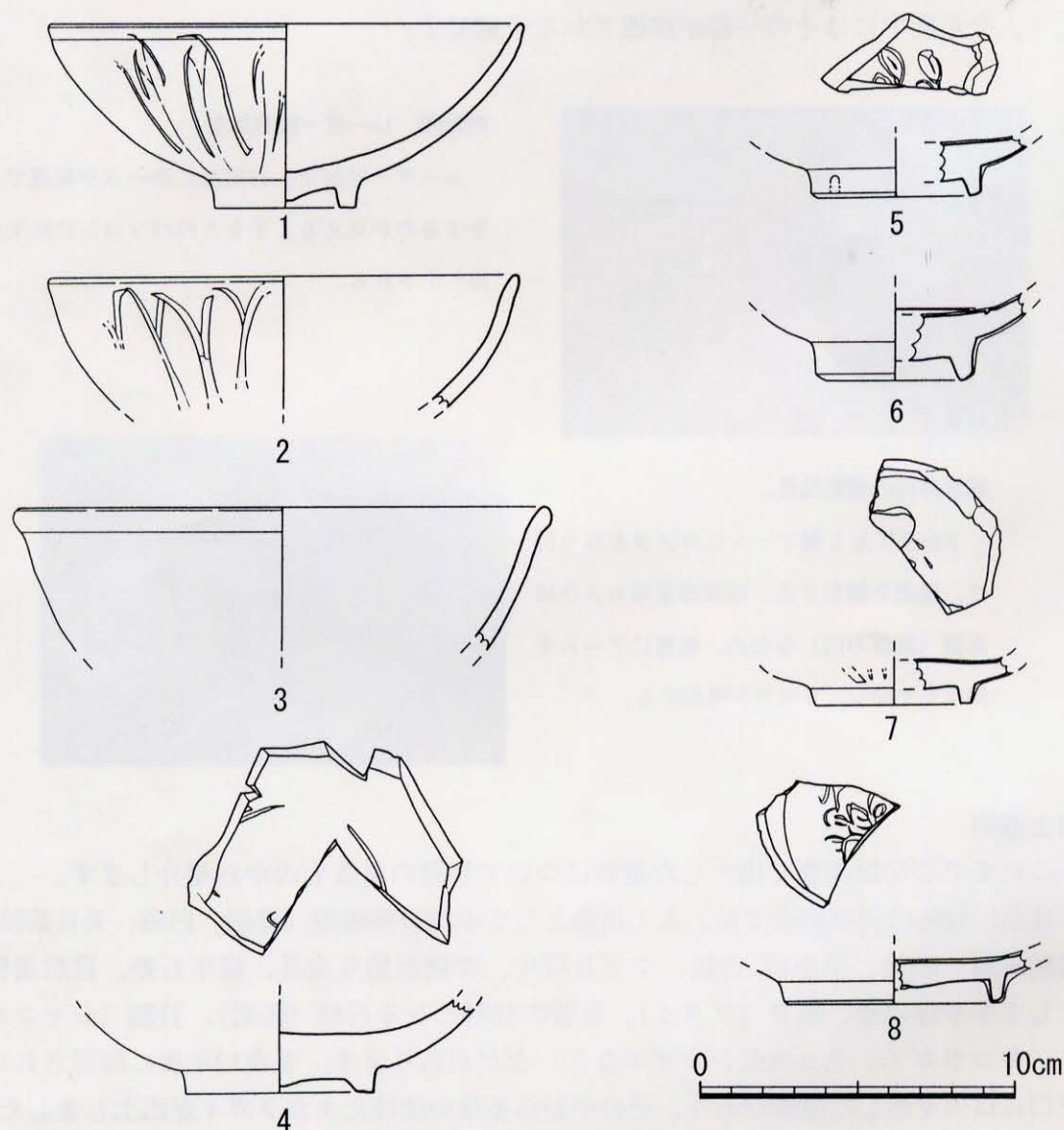
これまでの発掘調査で出土した遺物について特徴のあるものから紹介します。

具志川城跡の発掘調査では、人工遺物として中国製陶磁器（青磁、白磁、天目茶碗、褐釉陶器）の他、須恵器、古銭、すずり破片、青銅製飾り金具、扁平石斧、自然遺物として牛や豚の骨、魚骨（ブダイ）、石器の材料となる石材（砂岩）、貝類（シャコガイ、ヤコウガイ、チョウセンサザエなど）などがあります。平成12年度に確認された虎口には火を燃した痕跡があり、その中から多量の焼けたタカラガイが出土しました。見張りをしながら焚き火で暖を取り、貝を焼いて食べていたのかも知れません。出土

した遺物で、陶磁器について青山学院大学の手塚直樹先生に見ていただいたところ「陶磁器は、13世紀中から15世紀中までで、それ以降のものはありません。青花（染付け・有田焼に似た焼物）と土器が見られないのは面白いですね」とのことでした。

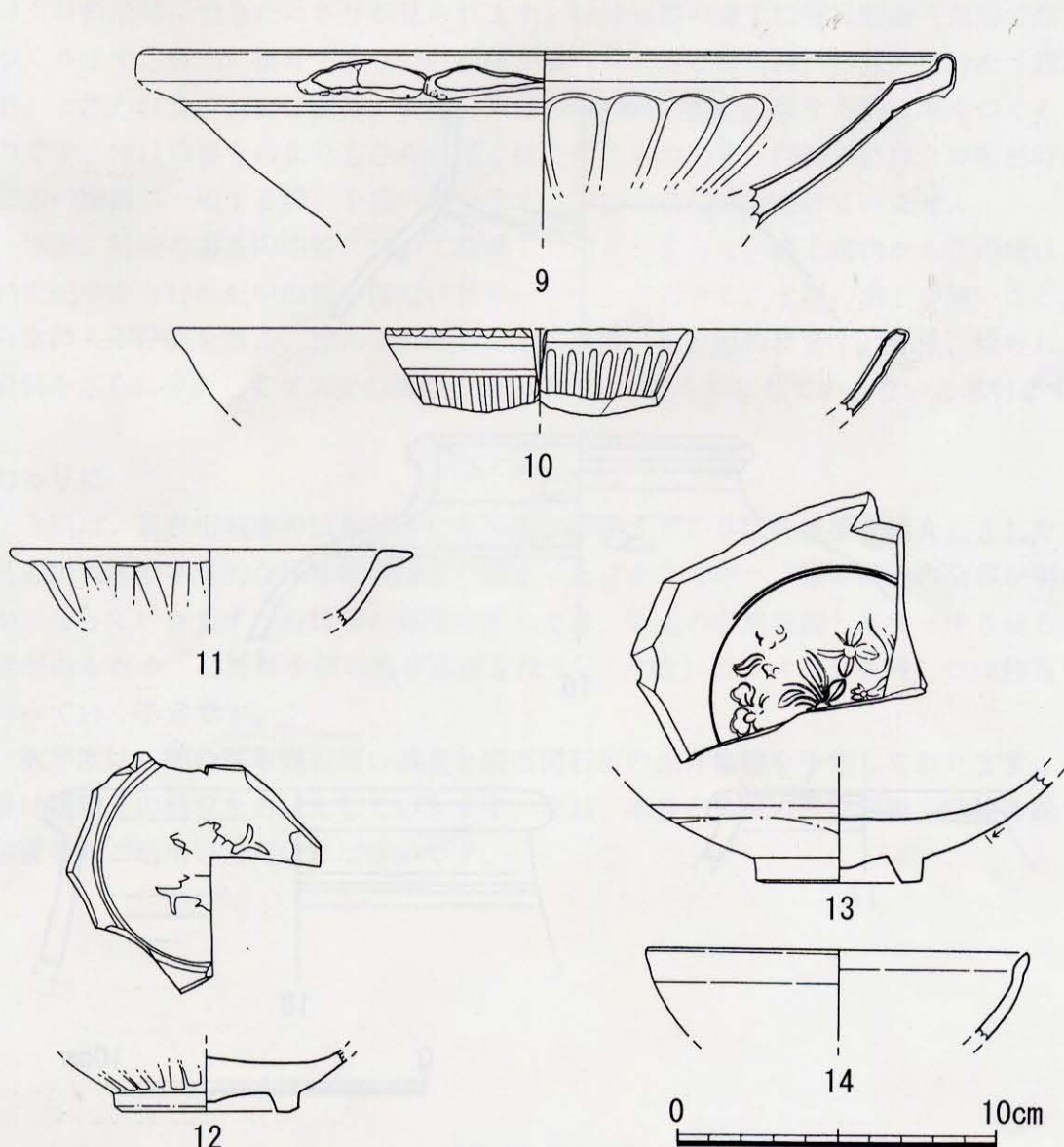
概報では、陶磁器の中から特徴のあるものを紹介します。ここに掲載した図面は、記録のための調査報告書に掲載する実測図です。持ち帰られた遺物は「洗浄」、出土地点を示すための「ナンバリング」後、小型CCDカメラ付きの「実測器」で実物実測を行い、トレースされたものです。図は表面図の断面図からなり、破片で口径のわかるものは復元図のかたちで紹介しています。なお、図の下に縮尺がつけてあり、コンパスで器の厚みや高さを求めることができます。

第2図では青磁の碗と皿を紹介しました。1は外面に「蓮」の模様を描いた「鎚蓮



第2図 青磁碗、青磁皿

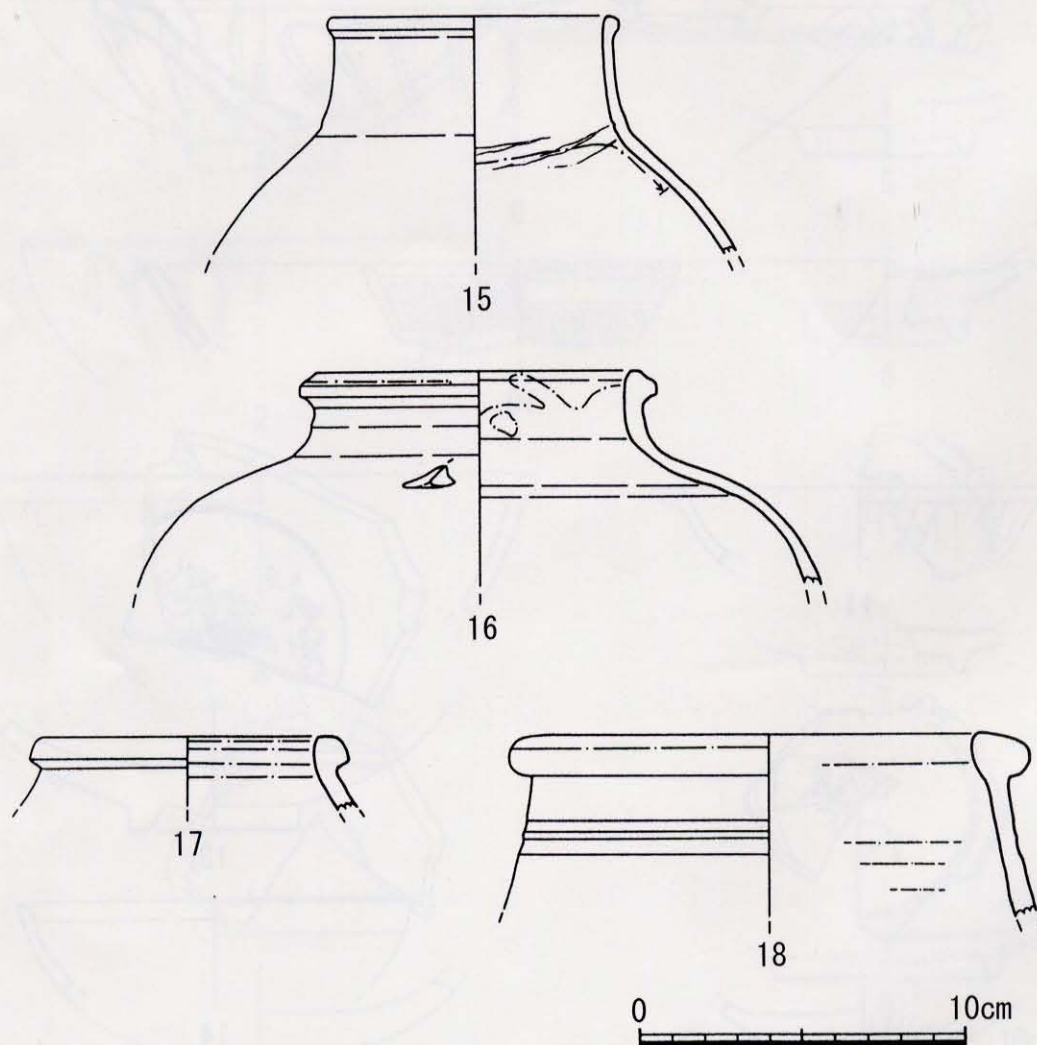
弁文碗」です。ろくろ整形で全体を作り、ろくろから切り離して伏せ、高台（底）を
 カンナで削って形を出します。外面をヘラ工具で丁寧に削りだし「蓮弁文」を造りだ
 します。乾燥後、青磁特有の青味のある透明釉薬を厚く掛けて焼きます。釉薬は焼く
 とき窯の中で引っ付かないように「畳付け（器を置くときに地に接する部分）」には
 つけていません。推算口径は約15cmで高さは約6cmの碗です。2は1と同様の蓮弁
 文を描きますが蓮弁は輪郭だけです。3は無文の碗です。焼が弱いため全体に黄色が
 かっています。もう一度適温で還元焼成するときれいな青がでると思われま
 す。4から6は碗の底部破片です。内底面（内側）4には「草花文」が、5にはスタンプによ
 る「印花文」が描かれています。7、8は青磁の皿の底部資料です。内底面にスタンプ
 による「印花文」が描かれています。8の外底には釉薬を丸く拭き取った「蛇の目」



第3図 青磁盤、青磁皿、白磁碗、天目茶碗

があります。これは重ね焼きするときに個々引っ付かないように底の大きさに合わせて釉を拭き取ったものです。

第3図では、青磁の盤(大皿)、皿、白磁碗、黒釉陶器碗を紹介しました。盤には口縁部(碗、皿類で口の部分)の形から真直ぐなものと口の近くで外側に折れて開くもの、口の端に刻みを入れて「齔」をつくるものがあります。9は内面に幅広の「蓮弁文」が描かれています。口縁端にはカマの中で焼く時に他の製品と癒着したと思われる「窯着痕」が観察されます。口径推算約26cm。10は口縁が直口タイプの盤です。胴部内外に細い蓮弁文が描かれています。口径約23cm。11と12は青磁の皿です。11は口縁部の破片で口縁が外に折れる「口折れ皿」で、外面にヘラによる蓮弁文を描いています。12は皿の底部資料です。内底面にスタンプによる「双魚文」が見られます。



第4図 褐釉陶器

外面にヘラによる蓮弁文があります。畳付けから外底面に釉薬は付けていません。11と12は釉、素地（土）、文様に似たところがあるため、同一個体ではないかと思われます。13は白磁碗の底部資料です。内底面にスタンプによる花文が描かれています。釉薬は胴部の一部から内底面にかけられており、底部にはかけていません。口縁部はありませんが、底部の状況から口縁でわずかに外反する碗だと思われます。14は黒釉をかけた「天目茶碗」の破片です。一部が窯変（窯の中で熱や酸素、灰などで化学変化を起こすこと。）し、茶色に変色しています。

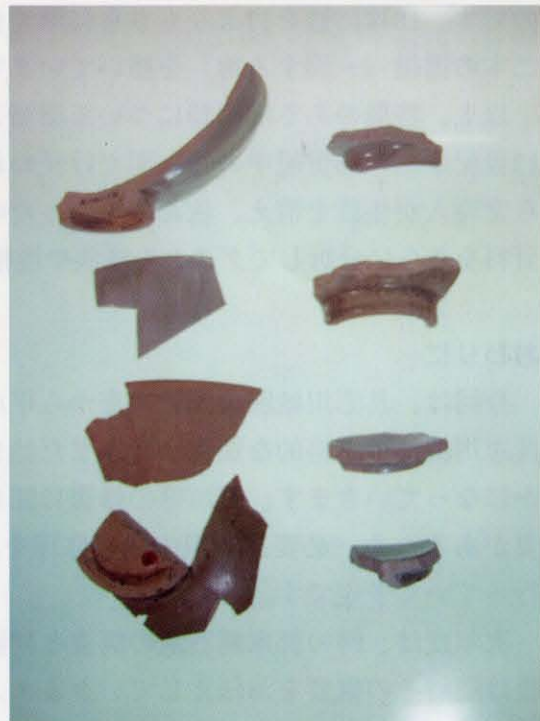
第4図は褐釉陶器の壺を紹介しました。図に示したものは頸部（壺の首にあたる部分）が明らかに直に立つものと、頸部が胴部より緩やかに立ち上がるタイプがあります。15は長頸の壺で、口唇は丸みのある「玉縁」をつくります。肩部と頸部の境目にロクロ整形時にできたヒネリが見られます。16は短頸の壺で口唇は断面三角形で厚くつくります。肩部に横耳を貼り付けた跡が見られることから四つの耳を付けた「四耳壺」とされます。17は胴部、肩部、頸部の境の無い壺で口唇を方形に厚くつくるものです。18は口唇を17よりもさらに厚く仕上げたものです。口縁下にロクロ整形時の二本の圈線（一周する線）を描いています。口唇には釉薬をかけていません。

以上、特徴のある陶磁器について簡略して紹介しました。出土遺物からこの城は、13世紀中から15世紀中の短い間だけ使われていたグスクで、土器の出土が無いことから常時人が住居を構え、住んでなかったのではないかと思われます。今後、得られる資料をさらに分析してグスクの機能や性格について明らかにしていきたいと思います。

おわりに

今回は、具志川城跡の試掘調査から平成15年度までの事業の概要を紹介しました。具志川城跡の本格的な保存修理はまだ始まったばかりであり、徐々にその全容が明らかになっていきます。石垣等の修復に関しては、周辺の自然景観ともマッチさせる必要があるため、必要最小限の保存修理を加え、「古城」のイメージを残しつつ修復を行っていく予定です。

次年度は、岬の郭東側石垣の調査と同西側石垣の保存修理を予定しております。今後は随時その概要をお伝えしていきます。なお、本書が地域の歴史学習や学校の総合学習等でご活用いただければ幸いです。



青磁碗・青磁皿（第2図）

発行／糸満市教育委員会 〒901-0392 沖縄県糸満市潮崎町1-1

編集／糸満市教育委員会文化課 TEL 098-840-8162

印刷／有限会社 金城印刷（糸満市西崎町5-9-16）